

津ノ井宇祢遺跡・津ノ井40号墳

広域農道建設に伴う発掘調査報告書

鳥取市文化財報告書 14
津ノ井宇祢遺跡・津ノ井40号墳

一九八四

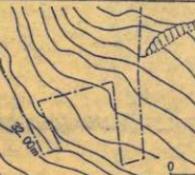
鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団

1984

鳥取市教育委員会
鳥取市遺跡調査団

鳥取市文化財報告書 / 4 正誤表

お手数ですが訂正願います。

P	行	誤	正
/	3~4	鳥取県農林振興局	鳥取地方農林振興局
/	//	半島状に延びた	半島状に延びた
3	第3図	遺跡名	10 因幡国守跡 11 因幡国分寺跡
5	第4図		
		第4図 津ノ井40号墳地形測量図	第4図 津ノ井40号墳地形測量図

序

本書は、県営鳥取地区広域農道建設に伴い実施された津ノ井遺跡発掘調査の記録です。

発掘調査によって、埋っていた古墳や住居跡などが掘りおこされ、多大の成果を得ることができました。これは津ノ井地区のみならず、鳥取市の古代史を解明するための貴重な資料となるものです。

この調査記録が、研究者のみならず多くの市民各位に活用され、先達の心と生活をしのぶよですがとなれば幸いです。また、今後一層の埋蔵文化財への理解と認識を深めるための礎となればと願うものです。

最後になりましたが、調査事業に際しての関係各方面各位の温かいご支援に厚く御礼申し上げる次第です。

昭和59年3月

鳥取市教育委員会

教育長 田村一三

例 言

1. 本書は、鳥取市教育委員会、鳥取市遺跡調査団が昭和58年度に実施した鳥取県営鳥取地区広域農道余戸工区内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書で扱う遺跡名については、いずれも新たに確認されたものであるので、鳥取市津ノ井字大芝下ノ谷所在遺跡を津ノ井40号墳、津ノ井字宇祢所在遺跡を津ノ井宇祢遺跡と呼称したい。また、津ノ井宇祢から検出された周溝を残す古墳については、43号墳としたい。なお、津ノ井40号墳から南東に続いて築造された39号墳間の2基の新確認の古墳については、40号墳から順に41、42号墳とそれぞれ呼んでおきたい。
3. 本書に掲載した挿図の方位は、第1図、第2図を除いて磁北を示す。また、レベルは海拔標高である。
4. 本書で用いた遺跡記号は整穴住居跡・SI、掘立柱建物跡・SB、貯蔵穴状土坑・SK、土壙墓・SX、溝状遺構・SD、ピット状遺構・Pとしている。
5. 図版8~10の番号は、本文中の遺物実測図に対応する。(例7-1は第7図1)
6. 本書の執筆編集は、調査参加者はじめ多方面の方々のご指導、ご援助を得て中野知照、杉谷美恵子、平川誠が行なった。
7. 本調査によって作製された実測図、写真及び出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
8. 調査関係者は以下のとおりである。
田村一三(教育長・団長)、吉田幹男、治部田史郎、平勢隆郎、若林久雄、木下秀夫、奥村淳一、谷本勝実、大石清人、田村草三(社会教育課長・事務局長)、山田健朗、小杉宗雄、前根達雄、猪原伸一、平川誠、内海あさ、川上智子、中野知照、濱原利明。

調査にあたっては、地元津ノ井、杉崎地区の皆さんをはじめとして多くの方々の作業協力を得た。

本文目次

第1章 はじめに	1	2. S I 2	11
第2章 遺跡の位置と環境	1	3. S B 1	11
第3章 調査の概要	4	4. S B 2	13
第1節 第1地点	4	5. S K 1	14
1. 墳丘	5	6. S K 2	14
2. 外部施設	6	7. S K 3	14
3. 埋葬施設	8	8. S K 4	15
4. その他の遺構	9	9. S K 5	18
5. 検出された遺物	10	10. 古墳周溝	19
第2節 第2地点	11	11. 検出された遺物	19
1. S I 1	11	第4章 まとめ	22

図目次

第1図 鳥取市南東部遺跡分布地図	3	第16図 S I 2・S B 2出土遺物実測図	13
第2図 津ノ井遺跡周辺遺跡分布図	4	第17図 S B 1平面・断面実測図	13
第3図 津ノ井40号墳位図	4	第18図 S B 2平面・断面実測図	14
第4図 津ノ井40号墳地形測量図	5	第19図 S K 1平面・断面実測図	15
第5図 津ノ井40号墳遺構配置図	6	第20図 S K 2平面・断面実測図	16
第6図 津ノ井40号墳断面実測図	7	第21図 S K 3平面・断面実測図	16
第7図 墳裾列石実測図	8	第22図 S K 4平面・断面実測図	16
第8図 S X 1平面・断面実測図	8	第23図 S K 5平面・断面実測図	16
第9図 中世墓配図	9	第24図 S K 1出土遺物実測図	17
第10図 S X 2平面・断面実測図	9	第25図 S K 1出土遺物実測図	18
第11図 津ノ井40号墳出土遺物実測図	10	第26図 S K 3・4・5出土遺物実測図	18
第12図 津ノ井字跡遺跡調査地図配図	11	付図1 S X 2・4出土古錢拓影図	10
第13図 津ノ井字跡遺跡構造配置図	12	付図2 津ノ井藏ノ谷出土遺物実測図	23
第14図 S I 1平面・断面実測図	13	付図3 津ノ井39号墳出土遺物実測図	23
第15図 S I 2平面・断面実測図	13		

表目次

出土遺物観察表・1	10
出土遺物観察表・2	20~21
付表1 出土遺物観察表(津ノ井藏ノ谷出土遺物、 津ノ井39号墳出土遺物)	24

図版目次

図版1 津ノ井40号墳近景、津ノ井40号墳表土除去後、調査風景	図版5 S K 1掘り方検出状況、S K 1遺物検出状況、S K 1・2検出状況、S K 3掘り方検出状況
図版2 S X 2集石検出状況、S X 2銅鏡出土状況、S X 3・4検出状況、S X 1土層断面	図版6 S I 1検出状況、S I 2検出状況、S B 1検出状況、S B 2検出状況
図版3 S X 1集石検出状況、墳裾列石検出状況、墳丘盛土堆積状況	図版7 第2地点調査後全景、古墳周溝全景、第2地点III・IV区全景
図版4 津ノ井字跡遺跡遠景、第2地点調査風景、第2地点近景	図版8 遺物写真
	図版9 遺物写真
	図版10 遺物写真

第1章 はじめに

県営鳥取地区広域農道は、広域幹農団地農道として千代川及びその各支流に沿ぐる農耕地を結ぶ基幹農道として計画され、昭和49年（1974）から整備が進められている。昭和57年（1982）、国府町岡分寺地区から鳥取市津ノ井、生山地区に至る余戸工区の工事が具体化し、工事主体者である鳥取県農林振興局より鳥取市教育委員会にて埋蔵文化財の有無について協議がなされた。これを受け工事予定路線の現地調査を実施したところ、新規に発見された古墳1基及び遺物散布地が存在することが判明した。この後、保護・保存についてその方法等の協議を重ねた結果、発掘調査を実施することとなった。調査は、昭和58年（1983）4月13日より昭和59年（1984）3月10日まで鳥取市遺跡調査団によって実施された。なお、現地での発掘調査は4月より8月まで実施し、以後、室内的整理・報告書の作成業が実施された。

第2章 遺跡の位置と環境

調査地は、鳥取市街地より約5kmほど南々東に向かった津ノ井地区に所在する。鳥取市との合併（1963）以前の岩美郡津ノ井村余戸である。鳥取平野の南端に位置し、東から半島状に延びた標高50m程の低丘陵を背にして南向きに展开する集落であり、前面には小平野が開けている。この地区は、この小平野での水田とともに背後の丘陵地での果樹栽培が盛んで、5月ともなると丘陵全体は梨の花の開花で白一色となる。また、良質の粘土を産するため古くから屋根瓦の生産地としても知られ、津ノ井瓦として著名である。

鳥取平野南部の原始・古代遺跡については、昭和30年代の鳥大歴史研究会等の精力的な調査が行なわれて以来その概略が知られるようになった。しかしながら、縄文・弥生時代遺跡は、平野内の調査が進んでいないこともあり、古墳に比べて非常に少なく、今後の調査の課題といえる。⁽¹⁾ 縄文時代の遺跡として晩期前葉を主体とする大路川遺跡が調査されている。⁽²⁾ アラカシ・トチなどの堅果類の貯蔵穴群が検出されたことで注目された。⁽³⁾ 弥生時代遺跡は、久末・古郡家遺跡、流水文銅鐸を出土した越路銅鐸出土地が知られている。前者は、は場整備事業に伴って調査された遺跡であるが、中期の獨立柱建物が検出されている。他に丘陵裾部から土器・石器の採集地がいくつか知られているが実態は不明である。⁽⁴⁾

鳥取平野南部の古墳は、古郡家1号墳、六部山3号墳などの前期大型前方後円墳古墳を中心に約700基の古墳が確認されているが、多くは中・後期の小規模古墳と考えられている。しかし、この古墳群のなかには、線刻壁画古墳を含む空山古墳群のような後期群集墳や家型石棺を持つ橋本古墳（橋本38号墳）などの特異な古墳が含まれ、注目されるところである。⁽⁵⁾ しかしながら、平野南部の古墳発掘調査例は少なく、果樹園耕作中の不時発見などによりその内部構造、副葬品などが知られているにすぎない。⁽⁶⁾ 今後精緻な分布調査等による古墳群の再構成を含めた研究が課題となるだろう。⁽⁷⁾ ⁽⁸⁾ ⁽⁹⁾

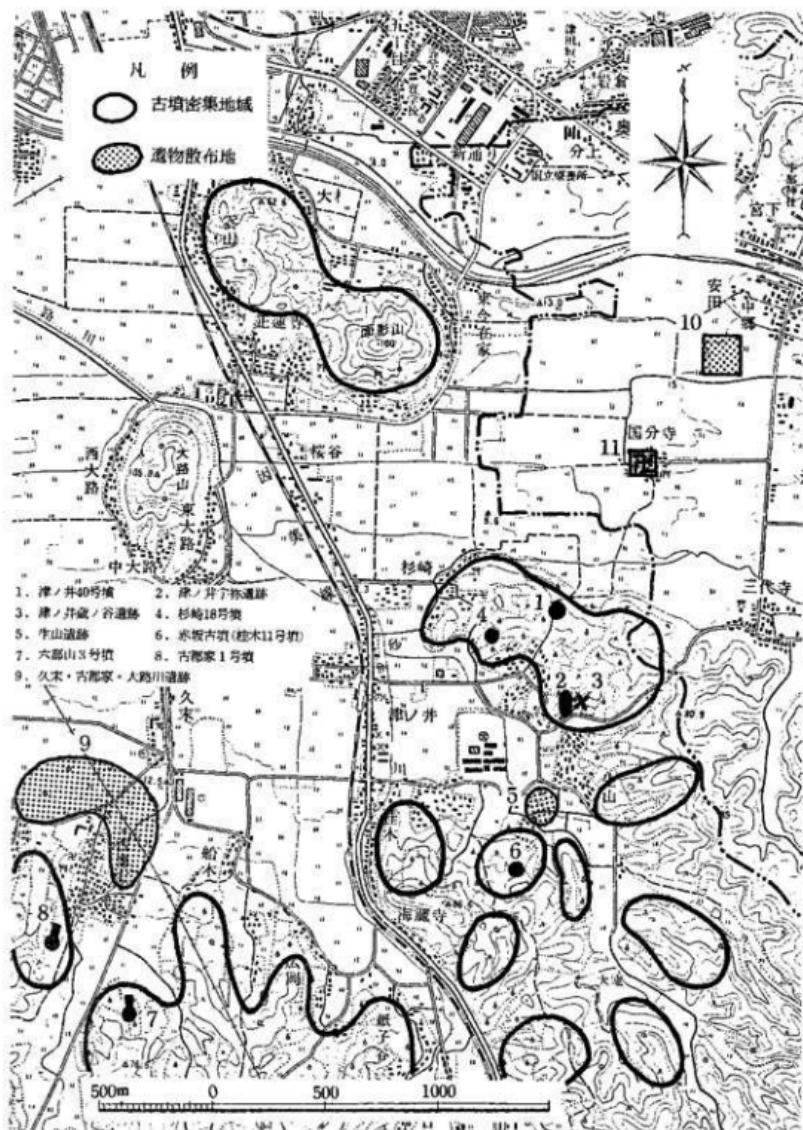
さて、調査地を含む津ノ井地区は、『和名類聚抄』にみられる法美郡津ノ井郷に比定されているが、これより以前の原始・古代遺跡も多く知られている。地区背後の丘陵上には約75基の古墳が確認されており、これらの古墳のいくつかは戰前からの果樹栽培、瓦焼成川粘土の採取のため、かな
らざしも保存状態が良いとはいえない。しかし、古式須恵器の出土した杉崎18号墳などの特徴的な古墳があり、この地域の歴史を理解するうえで貴重な資料となっている。集落跡等は、今回の調査で判明したとおりいくつかの散布地があり、丘陵上に存在するものと考えられる。また、國府平野に面した北側丘陵斜面には因幡御分寺瓦を焼いたとされる瓦窯跡の存在も知られている。¹⁹

今回の調査にあたっての分布調査、発掘調査中に知ることのできた出土遺物について、調査遺跡理解の一助としてここで紹介しておきたい（付図2、3 付表1）。先に述べたとおり、津ノ井地区の丘陵の多くが果樹園等に利用されているため、施肥等の耕作中に古墳等から遺物の出土することがままある。紹介する遺物も、耕作中に出土したものである。提供していただいた松田継雄、森本喜好尚氏にあらためて感謝したい。

付図2の遺物は、数年前松田継雄氏が氏所有の畠地（字蔵ノ谷）を耕作中に出土したものである。他にカマド片などがあり、古墳あるいは住居跡などの構造の存在が考えられる。

付図3は、津ノ井39号墳からの一括遺物である。森本喜好氏所有の果樹園であるが、氏によれば墳頂部よりまとめて出土し、石棺等の存在は認められなかったとのことである。39号墳は、調査を実施した40号墳との間に2基の古墳をはさみ、南方70m程に位置する。この丘陵の最高所に位置し、6基からなる小支群の墳墓的な古墳であると考えられる。出土した須恵器は、陶邑古窯跡群のMT15とほぼ同時期の所産と思われ、6世紀前半の時期があたえられる。²⁰

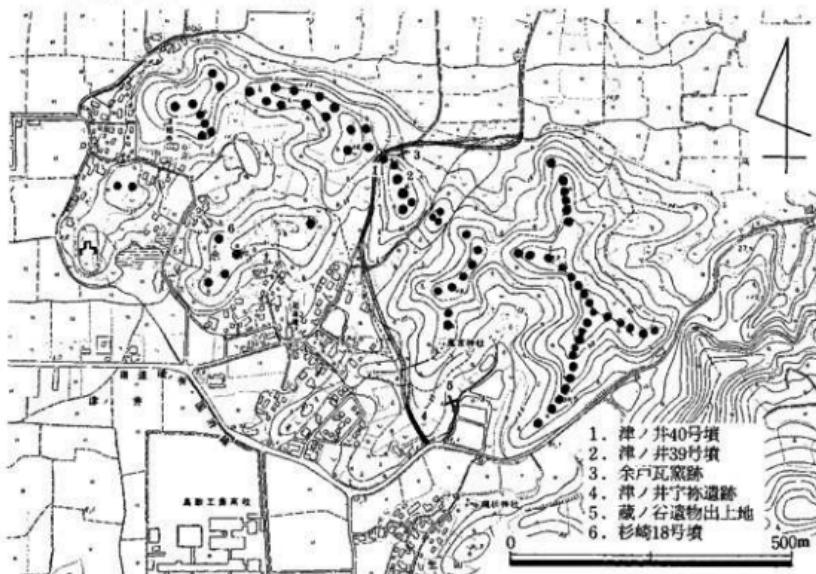
- 注1. 「ひすい」78~100号 佐々木古代文化研究室 1960~1962年
2. 「大路川遺跡調査概報」『鳥取市文化財報告書』鳥取市教育委員会 1976年
3. 「久末・古郡家遺跡発掘調査報告書」鳥取市教育委員会 1974年
4. 美和、橋本等から出土式土器、石器が出土しているとの記載が『鳥取県史1—原始・古代編』鳥取県 1972年等に見られるが詳細不明。
5. 古郡家1号墳調査団「美和古墳群」「ひすい」78~100号 佐々木古代文化研究室 1960~1962年
6. 「鳥取県史跡勝地調査報告書—第2冊—」鳥取県 1924年
7. 亀井熙人「5基の壁面系装飾古墳について」『鳥取県科学博物館報告』第4号 鳥取県立科学博物館 1965年
8. 治部田史郎「古墳分布から見た因幡地方の古代社会」「郷土と博物館」第24巻第2号 鳥取県立博物館 1979年
9. 亦坂古墳（桂木11号墳）海藏寺1号墳など。注1、注8など参照。
10. 寺西健一「杉崎18号墳出土の須恵器」「郷土と博物館」第28巻第2号 鳥取県立博物館 1983年
11. 川上貞夫「岡益の石堂」矢谷印刷所 1966年
12. 田辺昭三「陶邑古窯跡群」平安学園 1966年ほか



第1図 烏取市南東部遺跡分布地図

第3章 調査の概要

調査に際しては、その対象地が古墳（津ノ井40号墳）と散布地（津ノ井字称遺跡）に分かれていたため、便宜上古墳を第1地点、散布地を第2地点とした。

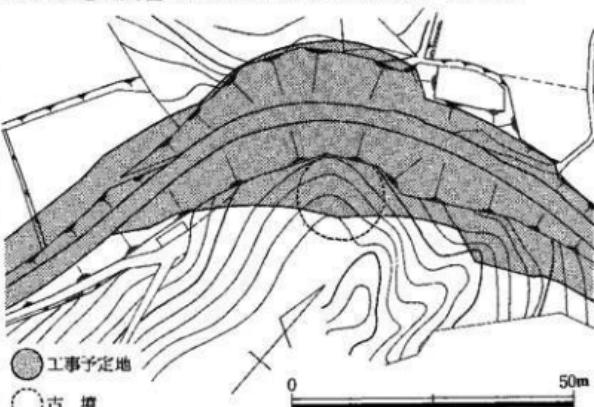


第2図 津ノ井遺跡周辺遺跡分布図（『改訂鳥取県道路地図第1分冊』とともに一部加筆訂正）

第1節 第1地点

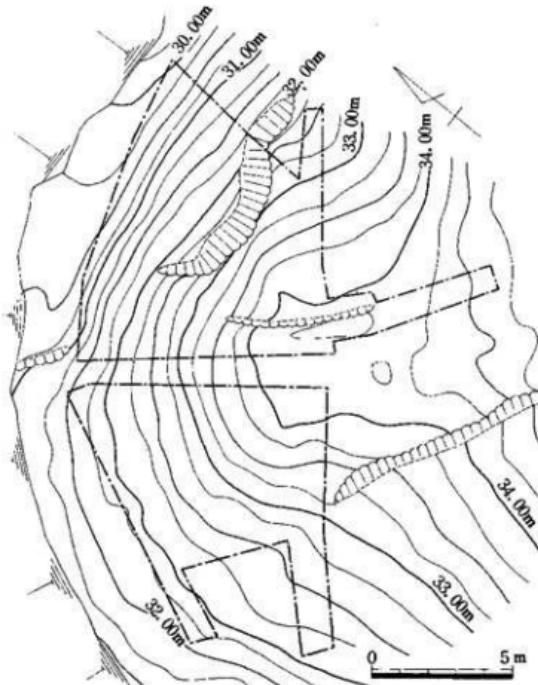
第1地点では、古墳の規模と築造状況を解明する事を主眼とした。古墳の地目が尾根軸線を境にして、雑木林と果樹園が造成されているため、果樹園側は造構が壊されていることが予想された。

このことも考慮に入れて工事予定地（●）を尾根軸線に沿って土層観察用ベルトを設定した。



第3図 津ノ井40号墳位置図

このベルトを境界に果樹園側をA地区、雑木林をB地区とし、それぞれの斜面及び墳頂と思われる傾斜変換点を中心にしてトレンチを設定した。以下、検出遺構の概要を略述していきたい。古墳時代の遺構としては、墳頂部より埋葬施設1基、第1・3・4トレンチより古墳周溝を確認することができた。またA地区では、墳裾部を巡っていたと思われる列石の一部が残存していた。埋葬施設では土師器の甕を出土しているが、古墳周溝よりの出土遺物はない。この他に墳丘斜面や、第5トレンチの表土中より須恵器の小片が検出されたが、

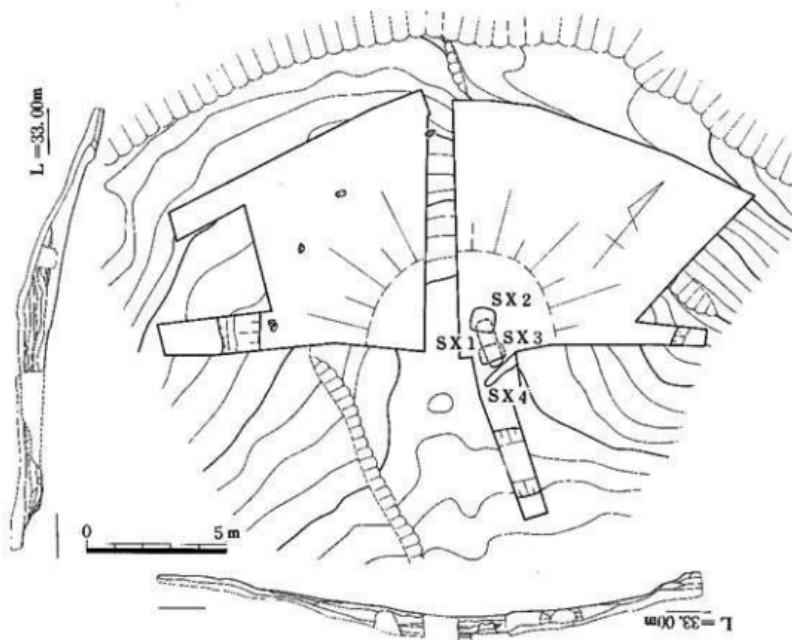


第4図 津ノ井40号墳地形測量図

本古墳に伴うものであるかどうかは不明である。中世以降では、墳頂平坦部において3基の土壙甕が確認できた。このうち1基は、集石を伴う土壙甕であり銅鏡5枚が検出された。他の2基では、土師質皿の小片や銅鏡1枚を検出したのみである。また第1トレンチの攪乱層より土師質皿2個体分と弥生時代後期に属する沿台口縁部の小片が出土しており、第1地点とその周辺では弥生時代から中世以降までの遺構が複合している。おおむね以上の様な調査を行ったが、以下、各遺構について詳細な説明を加えていきたい。

1. 墳丘(第4・6図、図版1・3図)

本調査は、前述したように墳丘斜面及び墳頂と思われる場所にトレンチを設定し、行われたが、その結果、第1~4トレンチで墳丘築成以前の旧表土と盛土を確認した(第6図)。また、第5トレンチでは、現地表下40cmで地山に当り、ピット状の土坑や攪乱穴を検出したが、第1トレンチで確認した古墳周溝に連なる遺構は検出されなかった。墳丘は丘陵の尾根軸線上に築かれ、杉崎から生山にかけて連なる丘陵の鞍部にかかる傾斜変換点の部分に立地する。確認された地山面は、現地表のように傾斜変換点から急傾斜を示さず、なだらかに丘陵鞍部へと続いている。また、今回調査



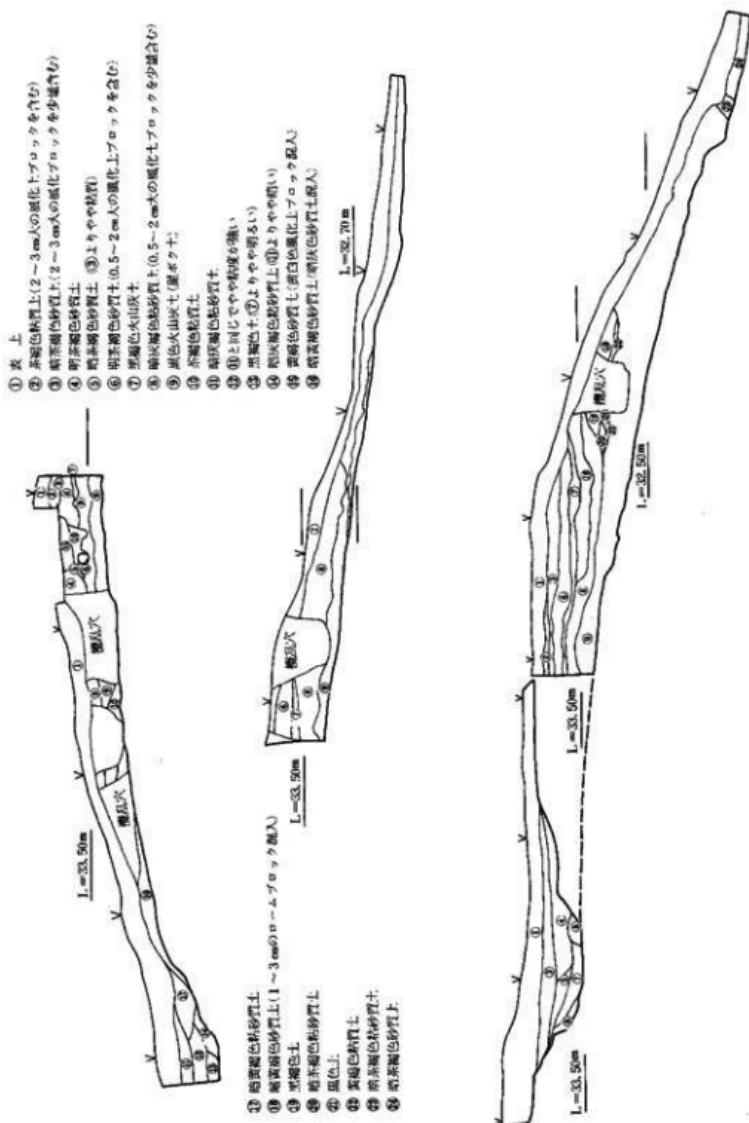
第5図 津ノ井40号墳造構配置図

を行った一帯には黒色火山灰層（クロボク）が堆積しており、包含されていた遺物から弥生後期以降～古墳時代後期以前に堆積したものであると考えられる。本古墳は、丘陵頂部から北西にのびる尾根を利用し、クロボク土の上に盛土を施して墳形を整えて形成されたと考えられる。盛土は、墳丘頂部のみに厚さ約50cmの堆積が認められるのみであった。

2. 外部施設（5・7図、図版3）

本古墳の外部施設としては、墳丘裾部に施された古墳周溝・列石がある。周溝は、第1・3・4トレンチで確認されている。第1・3トレンチでの周溝は、地山面まで掘込まれていたが、第4トレンチで確認された周溝はクロボクを掘込んだもので、隣接古墳と共有していると考えられる。本古墳の規模は、後世の開墾などによる改変を受けて明確にし得ないが、調査で確認された周溝や列石の位置により径約14m～17mと南北にやや長く、高さ約2mと推察される。本古墳では、周溝の他に外部施設の一つとして列石が掘げられる。しかし、ここでいう「列石」は、所謂「列石墓」あるいは「四隅突出型方形墓」などにみられる列石の様相はしていない。列石という範疇には入らないかも知れないが、南側の墳丘裾部に、ほぼ等間隔に3ヶの河原石が据えられている。

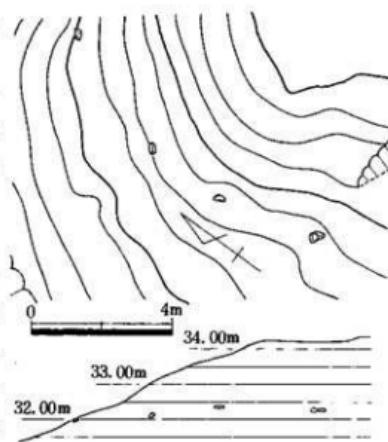
第6図 津ノ井40号 sondage pit profile diagram



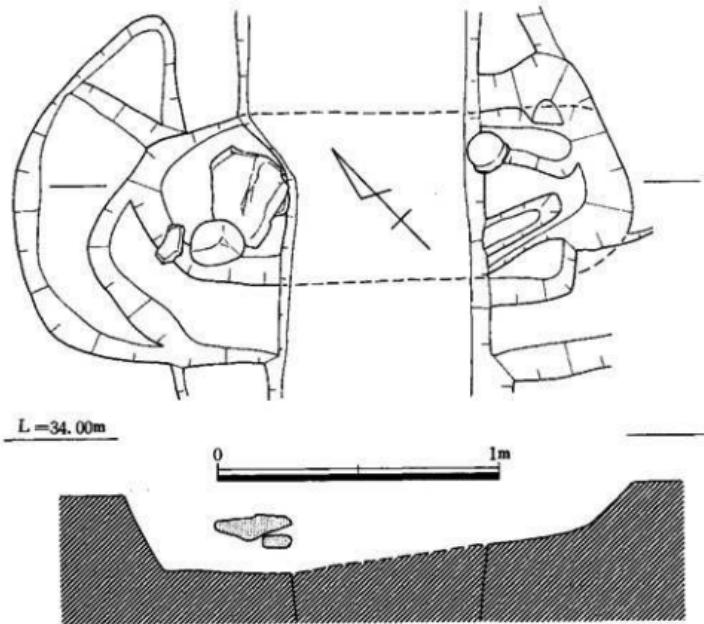
この石は、比較的大きなもので第1トレンチでの検出状況は、地山面に掘り方をもたせて配置しているが他のものは地山面直上かクロボクの直上に配置してある。北側の斜面では検出されていないので断定はできないが、墳丘を区画する様な性格をもたせたとも推察できる。

3. 埋葬施設（第8図、図版2・3）

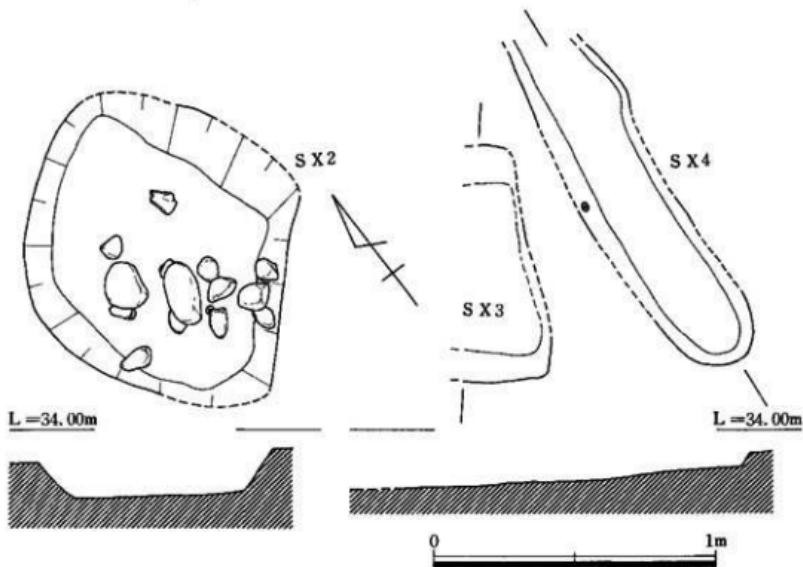
古墳時代のものと思われる埋葬施設として確認されたのはSX1のみであった。SX1は墳頂平坦部北端寄りに、丘陵輪線とほぼ平行して位置している。この位置からみて、SX1が本古墳の主体部と思われる。SX1の南側に同規模の埋葬施設の存在が考えられなくもないが、果樹園造成の為擾乱を受けて



第7図 墳裾列石実測図



第8図 SX1 平面・断面実測図



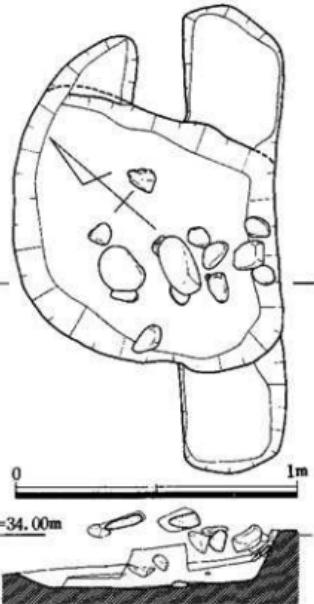
第9図 中世墓配置図（上）

第10図 SX2平面・断面実測図（右下）

おり確認することができない。墓墳は、検出面では長軸172cm、短軸60cmの細長い圓丸長方形を呈していた。墓墳は、盛土によって墳丘を形成した後に作られており、掘り込んだ面は明確にし得なかったが、墓墳の深さは約30cmと比較的浅かったようである。また墓墳の西端部分には扁平な石を使用した集石が認められるが、その性格は箱式石棺の痕跡とも考えられるが現段階では明確にしがたい。墓墳内に小形の甕が検出されたが、口縁部を下に転落したように出土しており、墓墳上面あるいは木棺上面に供献された遺物と思われる。

4. その他の遺構（第9、10図、図版2）

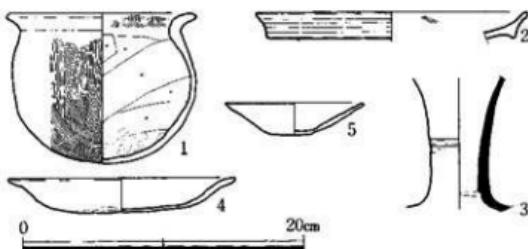
本古墳では、中世以降のものと思われる上墳墓が3基確認された。いずれも墳頂平坦部に作られ丘陵軸線に沿って位置する。SX2は、SX1の集石が見られた部分のはば真上に位置する。まとめはないが集石がみられ



長軸97cm、短軸87cmの不整な方形を呈し、下部より銅鏡5枚が検出された。SX3は、SX2の東側約50cmに位置し第3トレンチの断面より確認された。長軸は約80cmを測るか短軸は不明。遺物の上師質土器の小片がみられた。SX4は、SX3の東側約25cmに位置する。南北に長い土壤で、反軸約140cm、短軸約30cmを測る。他の毫礪と比べて質質であるため、毫礪とは断定しがたいが銅鏡一枚の出土を見る。

5. 検出された遺物（第11図、付図1、図版9）

津ノ井40号墳において出土した遺物は、弥生時代後期から中世にいたるまでの上器片が確認された。内訳は、弥生時代後期に属する壺口縁部片1、古墳時代遺物として土師唇壺1、須恵器片2を数える。中世遺物として、土師質皿2、占鏡5枚を検出した。これらの遺物のうち遺構に伴うものは、40号墳の主体部SX1より出土した土師器壺と中世盤SX2・4より出土した占鏡のみである。他の遺物は、弥生式土器片は埴丘築成以前の遺物包含層より出土し、土師質土器などは機乱穴や表土に散乱していたものである。



第11図 津ノ井40号墳出土遺物実測図



付図1 SX2・4 出土古鏡拓影図
1. 治半元年・治半年間A.D.1064-7 (SX2)
2. 明神通宝・太宗15年A.D.1415 (SX2)
3. 聖元通宝・武德4年以降A.D.621 (SX4)

出土遺物観察表・1

実測図番号	器種	成形・調整の特徴	色調	胎土	備考
第11図 1	壺	外面口縁部ナデ、以下ハケ目。内面口縁部ハケ目調整のちナデ、頸部ナデ、肩部ヘラケズリ、底部指頭圧痕。	外面淡褐色、内面橙色、赤色。	2~3mmの砂粒を含む。	完形。内面炭化物付着。
＊ 2	器台	外面口縁部に四条の沈線、以下ナデ。内面口縁部剥落不明なるもヘラミガキ痕。	灰色、暗灰色。	1mm前後の細砂を含む。	
＊ 3	須恵器	外面ヨコナデ、頸部に、二条の沈線。内面ヨコナデ、頸部ナデ。	楕円色、暗褐色。	0.5mm以下の微砂を含む。	接合部に亀裂有。
＊ 4	环	口縁部内外面ヨコナデ。外面底部ナデ及び指頭圧痕。内面底部ナデ。	楕円色、暗褐色。	精選された緻密胎土。1mm大の細砂有。	完形。口縁部滴出。
＊ 5	环	口縁部内外面ヨコナデ。外面ナデ、内面ヨコナデ、底部ナデ。	楕円色。	精選された緻密胎土。1mm大の細砂有。	

第2節 第2地点

第2地点は、津ノ井字宇祢に所在する弥生時代終末から古墳時代にかけての複合遺跡である。調査を行ったのは、農道の東側の一帯高くなっている畑地を対象地とした。県道津ノ井・三代寺線と広域農道予定地の接する地点を起点とした。農道予定地のセンターラインより東側に10×10mのグリッドで、起点より順にⅠ～Ⅶ区の調査区を設定した。この調査区のうち、調査を実施したのはⅢ～Ⅶ区である。

調査の結果、竪穴式住居跡2棟、掘立柱建物跡2棟、袋状土坑4基、古墳周溝などの各種遺構とともに多数の土器を検出した。

1. S I 1 (第14図、図版6)

Ⅵ区からⅦ区にかけて中央部に所在し、S B 1の北側に位置する。平面形は、古墳周溝によって削平され不明確であるが長方形をなすと思われる。長辺(推定)約4.25mを測る。短辺は測定不能だが、約2.4m程度と推定される。この場合の床面積は10.2m²で、主軸N40°Wになる。壁高は不明であるが、東壁にそって幅10～20cm、深さ10cm前後の側溝をもつ。側溝の底部に、補助柱穴が残っている。構造柱は、本来浅く埋められたものと思われ、古墳周溝によって消滅していた。

S I 1はそのほとんどが削平を受けているため、出土遺物は検出できていない。このためS I 1の建てられた時期を確定することはできないがS I 2と同時期と考えても支障なかろう。

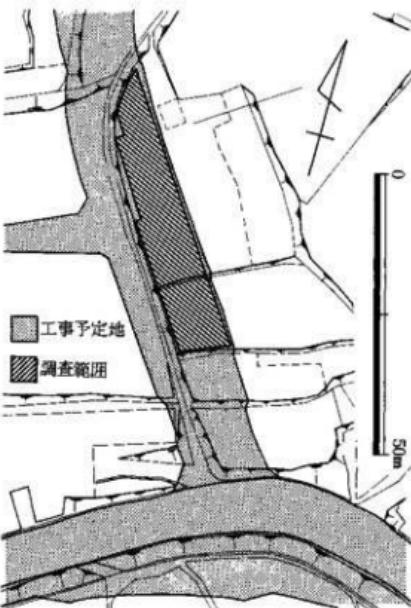
2. S I 2 (第15図、図版6)

Ⅵ区の北西隅に所在し、S B 2の西隣りに位置する。平面形は、後世の削平を受けており不明であるが、長方形ないしは正方形をなすと思われる。残存する長辺約3.9m、短辺約1.6mを測る。主軸はN50°Wをとる。壁高は、北壁で約40cm、東壁で約20cmを測る。北・東壁下面にそって幅10～20cm深さ10cm前後の側溝をもつ。ピットは床面と側溝で検出しているが、構造柱に伴うピットはみられない。側溝にみられるピットは補助柱のためのものと思われる。

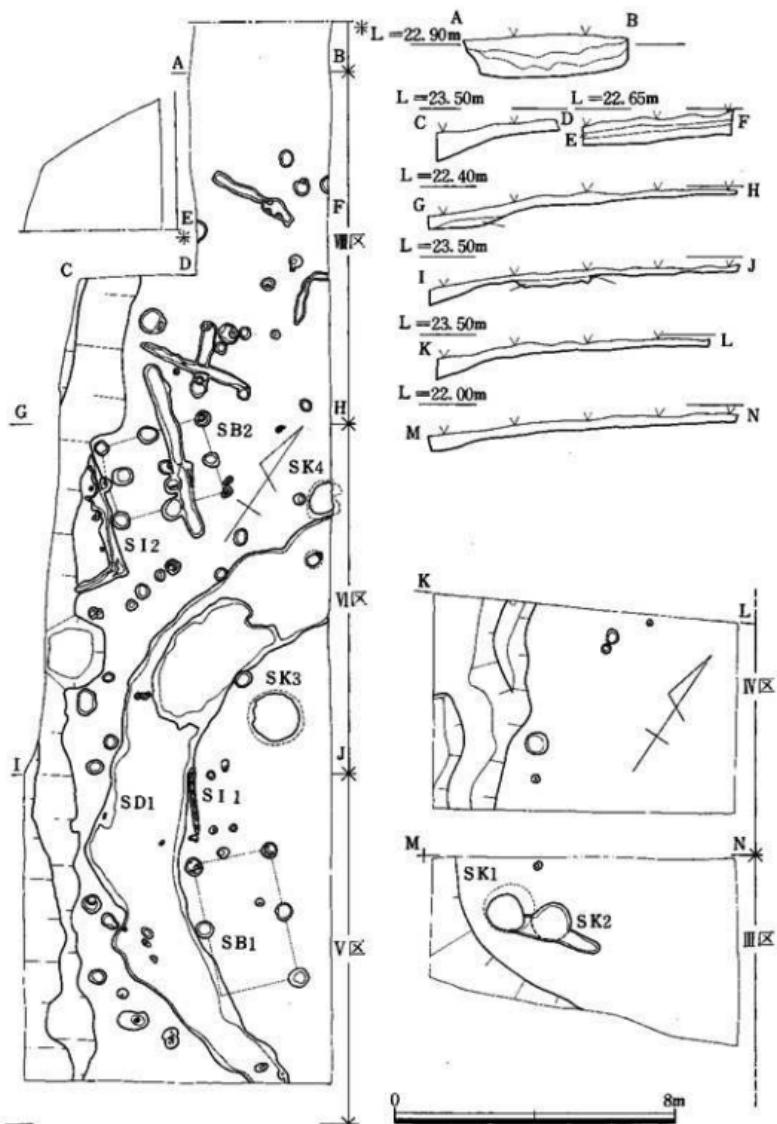
出土土器は、東壁直下と埋土中に観察されたが出土量は少ない。これらによりS I 2は古墳時代前期前半頃と考えられる。

3. S B 1 (第17図、図版6)

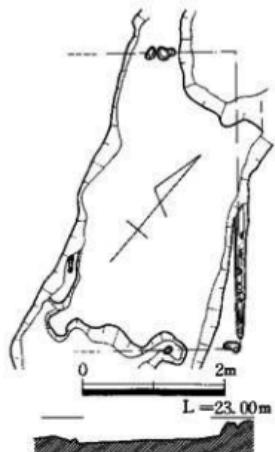
Ⅴ区東側に所在し、S I 1の南側に位置する。1×2間の建物で、桁行長3.85m、妻通長2.31m



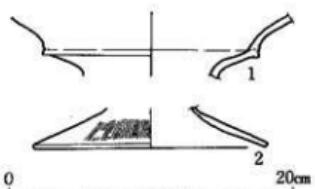
第12図 津ノ井字宇祢遺跡調査地区配置図



第13図 津ノ井宇祢遺跡構造配置図

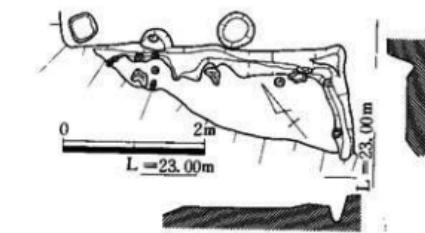


第14図 S I 1平面・断面実測図

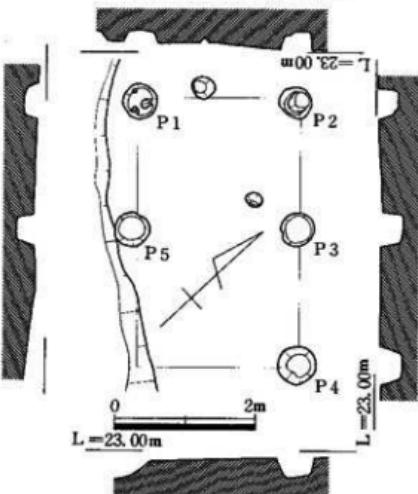


第16図 S I 2・SB 2出土物実測図(上)

第17図 SB 1平面・断面実測図(右)



第15図 S I 2平面・断面実測図



を測り、主軸はN 47°Wをとる。各柱穴の規模は、P 1 (49×51-19)、P 2 (45×46-27)、P 3 (50×49-30)、P 4 (56×56-29)、P 5 (51×50-25) cmで、柱穴間距離はP 1～P 2間より順に2.31、1.85、2.00mを測り、P 5～P 1間は1.85mである。

遺物の出土はみられなかったが、古墳調査との切り合い関係から古墳時代前期から中期頃の建物と考えられる。

4. SB 2 (第18図、図版6)

V区中央の北寄りに所在し、S I 2の東側に位置する。桁行2間、梁間2間の総柱の建物である。桁行長3.03m、妻通長2.26mで主軸はN 40°Eをとる。各柱穴の規模はP 1 (40×40-13)、P 2 (56×48-21)、P 3 (42×45-42)、P 4 (44×50-16)、P 5 (44×32-13)、P 6 (推定64×61-40)、P 7 (50×50-21)、P 8 (推定40×48-16) cmで、柱穴間距離はP 1～P 2間より順に1.47、1.58、1.20、1.06、1.53、1.52、1.24、1.04mを測る。

山上遺物はほとんどみられないが、P4より上師器片が出土している。時期はS I 2の切り合いと出土遺物により古墳時代前期後半から中期初頭と考えられる。

5. SK 1 (第19図、図版5)

Ⅲ区の中央部北寄りに在り、SK 2の西側に位置する。遺構検出面は現地表下約30cmのローム層上面である。検出面掘り方の平面形は不整円形を呈し、長径118cm、短径102cmを測る。最深部55cmで底面に達し、その標高は20.4mである。壁面はていねいに掘削され、底面から鋭角に湾曲して開口部へむかう。断面形は

整った袋状を呈しているが、南半分は後世の所作による削平をうけており、およそ全体の3分の1程度遺存しているのみである。底面の平面形は円形を呈し、長径152cm、短径145cmを測る。土坑内には、粘質の黒褐色土が埋積していたが、堆積状態は把握しえなかった。

遺物は多量に出土しており、弥生式土器、古式土師器がみられ鉢形器台、高杯、脚、甕、壺などが確認された。土坑内の遺物出土状況は、廃棄状態を示すと思われ遺存状態が良好であった。時期はこれらの土器により弥生時代終末期から古墳時代前期前半に比定することができる。

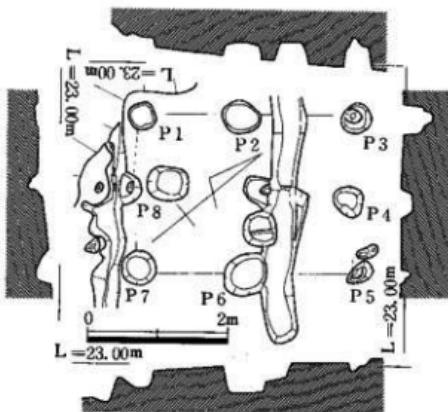
6. SK 2 (第20図、図版5)

Ⅲ区の中央部北寄りに所在し、SK 1の東側に位置する。遺構検出面は現地表下約30cmのローム層上面である。検出面掘り方の平面形は円形を呈するが、南半分を溝状遺構によって切られている。検出面での径は112cmを測る。最深部は12cmを測り、土坑の底部のみ残存しているにすぎない。土坑内には黒褐色土が埋積していたが、堆積状況は不明である。

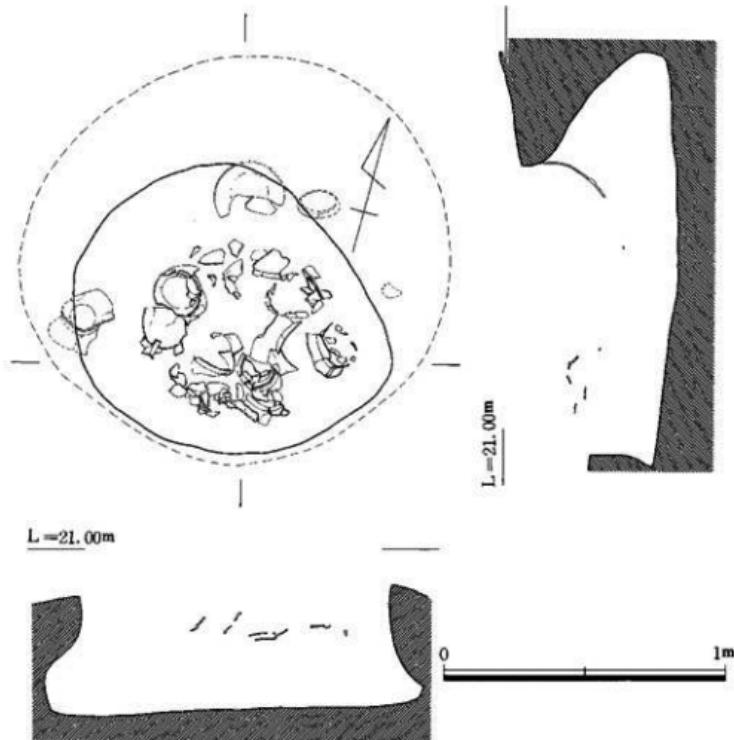
遺物は土師器甕の口縁部片と自然石が出土したのみである。この土器片のみで判断するならば、古墳時代前期前半のころのものであったことが考えられる。

7. SK 3 (第21図、図版5)

Ⅶ区の南東部に位置する。この土坑より南西方向に約2mの位置にS I 1が所在している。遺構検出面は、現地表下約15cmのローム層上面である。検出面掘り方の平面形はほぼ円形を呈し、径約1.4mを測る。最深部は約33cmを測り、底面は平坦である。底面の周囲に幅15~20cm、深さ6~12cmの側溝を巡らす。底面平坦部の平面形は不整円形を呈し、径約130cmを測る。側溝部分も含めた、底面の径は約170cmを測る。土坑内には主として粘質の黒褐色土が埋積していた。堆積は3層認められたが、その状態が時期を分けるとは考え難い。上層は若干細かなローム土塊が混入していた。



第18図 SB 2 平面・断面実測図



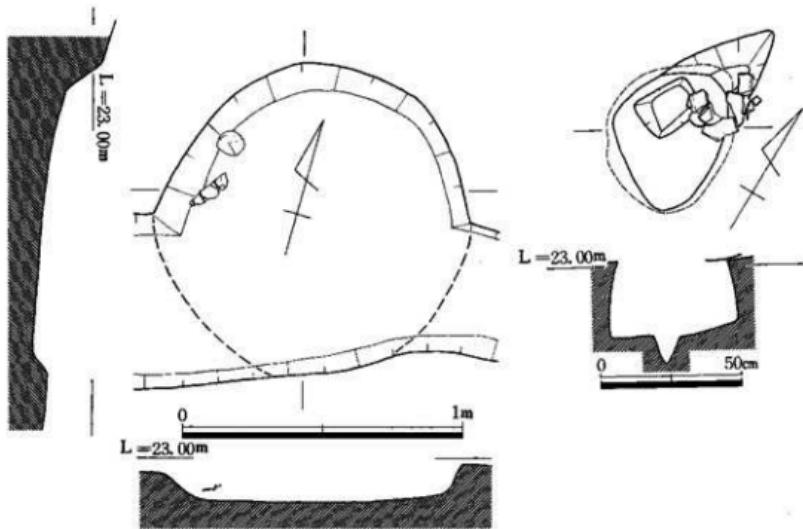
第19図 SK 1 平面・断面実測図

遺物は、全体にわたって埋っていたが量は少ない。器種としては、甕、壺、器台などがみられるが、炭化できたものは3点のみである。時期は古墳時代前期前半と考えられる。

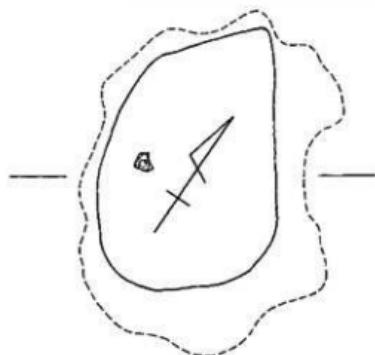
8. SK 4 (第22図)

W区の北東隅に所在し、S B 2 の東方約2.2mに位置する。遺構検出面は現地表下約15cmのローム層上面である。検出面掘り方の平面形は不整な長円形を呈し、長径86cm、短径63cmを測る。最深部44cmで底面に達し、その標高は約22.7mである。壁面は粗く、底面からゆるやかに湾曲して開口部に向う。断面形は袋状を呈し、埋土は2層認められた。上層は粘質の黒褐色土が堆積し、下層は暗黄褐色粘質土が埋っていた。貯蔵穴とは認めがたいが、袋状土坑として取扱っておく。

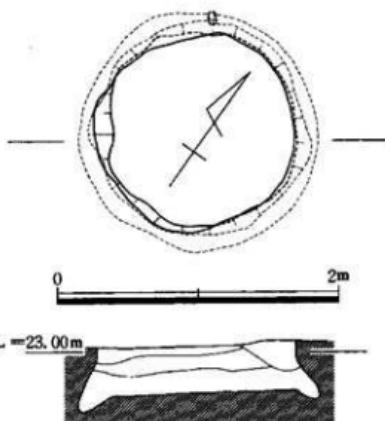
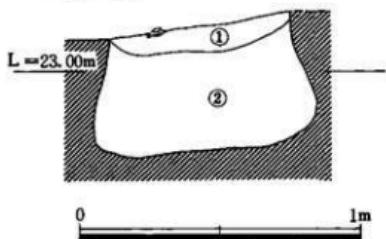
遺物は、上層の黒褐色粘質土中より上師器の低脚杯が検出された。この土器からみて、時期は古墳時代前期前半頃と考えられる。

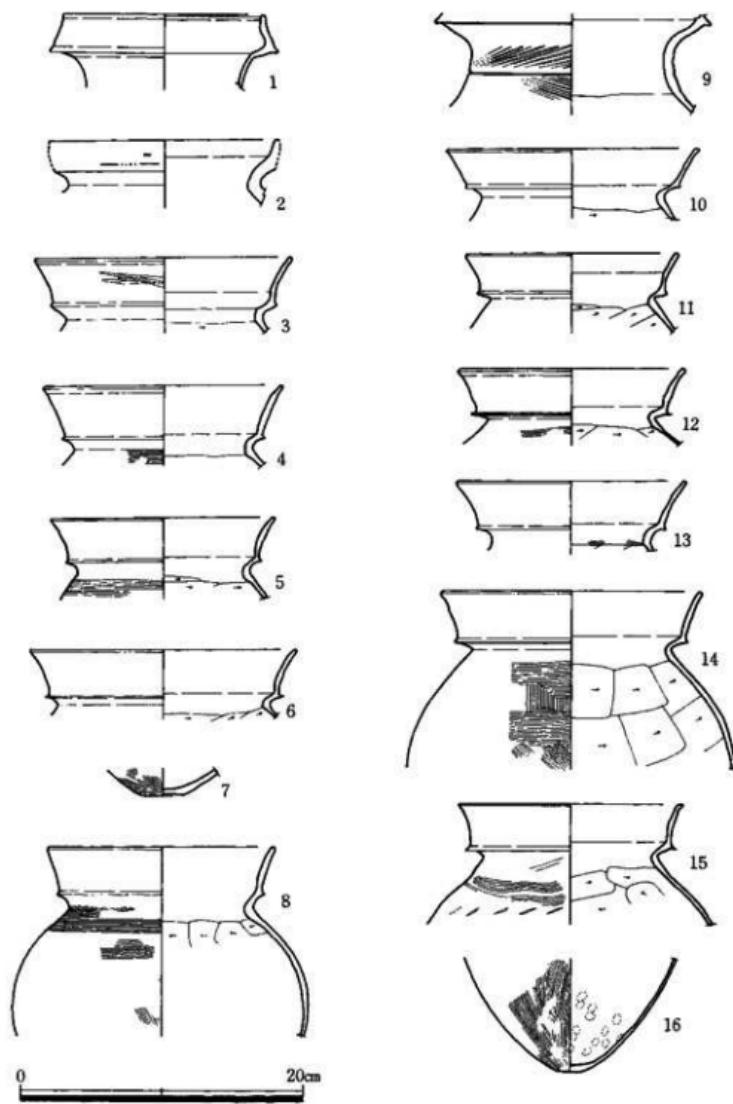


第20図 SK 2 平面・断面実測図（左上）
 第22図 SK 4 平面・断面実測図（左下）
 第23図 SK 5 平面・断面実測図（右上）
 第21図 SK 3 平面・断面実測図（右下）

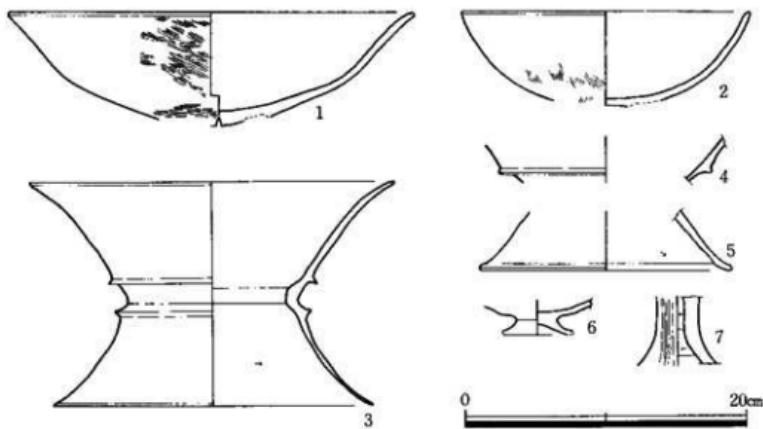


① 黒褐色粘質土
 ② 暗黃褐色粘質土

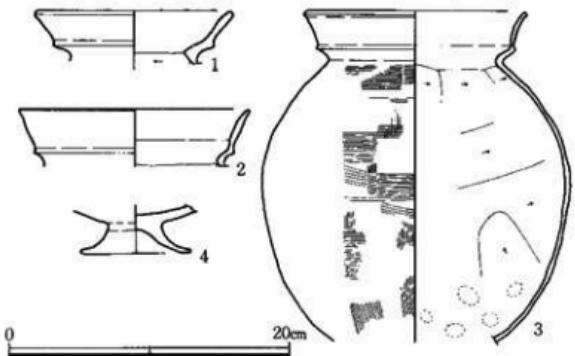




第24図 SK 1 出土遺物実測図



第25図 SK 1 出土遺物実測図



第26図 SK 3・4・5 出土遺物実測図

9. SK 5 (第23図)

VI区中央部の東端に位置する。北側にSK 4が所存し、直上を古墳周溝が掘削されている。遺構検出面は現地表下約30cmのローム層上面である。検出面掘り方はほぼ円形で一部浅い掘り込みがあり、一見三角形状を呈した土坑である。この場合、長径71cm、短径38cmを測る。検出面から26cmで底面に達し44×55cmの平坦部をつくる。壁面はゆるやかに湾曲して開口面に向う。底面には(16×22-10)の規模をもつビットがみられる。土坑内には、上層に黒褐色粘質土、下層に暗褐色粘質土が堆積していた。

遺物は、土坑上面に甕が埋置されていた。時期はこの土器からみて古墳時代前期前半頃のものと

思われる。

遺構の性格は不明であるが、規模や形態などから柱穴の可能性も考えられる。しかし、今回調査した範囲内ではこの柱穴に関連すると思われるピットは確認できなかった。

10. 古墳周溝 SDI (第13図、図版7)

VI区からVII区にかけて位置する。周溝の幅約1~2.8m、深さ約20~40cmを測る。他の遺構と同様に、後世の削平をうけており全体的に浅い周溝である。古墳の墳丘部分は、ほとんどが盛土であったと思われ、後世の削平によって墳丘部分も消滅したものと考えられる。古墳の規模は径17mの円墳で、周溝も含めると18~20mのものになる。埋土は粘質の暗褐色土がみられたが、堆積の状況は明確ではない。

遺物は多量に出土したが、いずれも小片で図化可能なものは極めて少量であった。周溝に伴うと思われる土器はみられなく、後世の削平時に他の遺構の土器も混入したと考えられる。しかし、2~3片であるが須恵器片も出土しており、古墳の築造時期もこの須恵器に対応するものと思われる。この場合、古墳時代中期から後期にかけての築造と考えられる。

11. 検出された遺物

津ノ井字跡遺跡では、多数の遺物が検出された。調査区の全域で確認できたが、遺物包含層と遺構面の一部は既に削平を受けており、ほとんどが遺構に伴うものであった。遺構に伴う遺物のうち大部分は、SK1と古墳周溝の埋土中のものであり、少量であるがSK3・4・5、SI2、SB2でみられたのみである。他の柱穴とみられるピット中の遺物は極く少量で、遺構を性格づける遺物の検出はできなかった。SK1では壺、甕、高杯、低脚杯、器台などが検出され、これらの土器からみて弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて埋積されていたことが判明した。図化段階では完全に復元しえなかったが、完形品の多いのが特徴で同時期の一括資料としては優品である。SK3では図化可能なものは甕のみであった。SK4は土坑上面より検出された低脚杯のみである。SK5では、土坑上面に埋置された甕のみであったが完形に近いものである。これらはいずれも古墳時代前期前半ころのものと思われる。本遺跡の竪穴住居跡や掘立柱建物に関連した遺物はほとんどみられなかつたが、わずかに床面や柱穴に残存していた甕の口縁部片や高杯脚部などの小片であった。これらの遺物での時期決定は困難であるが、おおよそ古墳時代前期後半から中期にかけてのものと思われる。古墳周溝の埋土中の遺物は、古墳築造時もしくは破壊時による埋積と思われ、古墳築造を推定させる遺物は見当らない。しかし他の遺構との切り合いかから考えて、古墳時代中期以降と思われる。しかも、墳丘はほとんどが盛土による築成であったと考えられる。

出土遺物観察表・2

実測図番号	器種	成形・調整の特徴	色調	胎土	備考
第16図 1	器台	受部外面削落不明、内面ヨコナデ。	灰褐色。	1mm以下の細砂を含む。	
※ 2	高杯	脚底部外面ハケ目、内面削落不明。脚端部ナデ。	赤褐色、外 面一部褐色。	1mm前後の細 砂を多く含む。	外面黒斑。
第24図 1	壺	口端面ナデ。外面口縁部ヨコナデ、頸部削落不 明。内面口縁部ヨコナデ、以下削落不明。	淡黄褐色。	0.5mm以下の 微粉を含む。	内面黒斑。
※ 2	壺	外面口縁部風化剝落著しくなるも擦拂平行沈線 をめぐらしたと思われる。外面頸部ヨコナデ。 内面口頸部削落不明、肩部ヘラケズリ。	外面褐色。 内面褐色、 黒色。	2~3mmの砂 粒を含む。	内面黒斑。
※ 3	壺	外面口頸部ヨコナデ、口縁部ヘラミガキ痕。内 面口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、以下ヘラケズリ。	淡褐色。	1mm前後の細 砂をわずかに 含む。	外面スス付 着。
※ 4	壺	口縁部内外面及び外面頸部ヨコナデ。外面肩部 ハケ目。内面頸部ナデ、以下ヘラケズリ。	淡褐色。	1~2mmの細 砂を多く含む。	外面スス付 着。
※ 5	壺	口縁部内外面及び外面頸部ヨコナデ。外面肩部 ハケ目。内面頸部ナデ、以下ヘラケズリ。	淡褐色。	1mm前後の細 砂を含む。	
※ 6	壺	外面及び内面口縁部ヨコナデ。内面頸部ナデ、 以下ヘラケズリ。	外面灰褐色。 内面暗褐色。	1~2mmの細 砂をわずかに 含む。	
※ 7	底部	外面ハケ目。内面ヘラケズリ。接地面同一方向 のハケ目。	外面黑色。 内面黒褐色。	2~3mmの砂 粒を含む。	底面不整凹 形。
※ 8	壺	口縁部内外面ヨコナデ。外面頸部以下ハケ目。 内面頸部ナデ、肩部以下ヘラケズリ。	褐色。	1~2mmの細 砂を含む。	
※ 9	壺	外面頸部に工具原体による一条の沈線を施しそ の上下に工具原体による連続刺突文をめぐらす。 内面は頸上部よりヨコナデ、ナデ、肩部ヘラケ ズリ。	褐色。	1mm前後の細 砂を含む。	
※ 10	壺	外面口縁部削落不明、頸肩部ヨコナデ。内面口 縁部不明、肩部ヘラケズリ。	褐色。	1mm前後の細 砂を含む。	
第24図 11	壺	口頸部内外面ヨコナデ。外面肩部以下不明。内 面肩部以下ヘラケズリ。	褐色。	1mm前後の細 砂を含む。	外面スス付 着。
※ 12	壺	口縁部内外面及び外曲頸肩部ヨコナデ。外面肩 部ハケ目。内面頸部ナデ、肩部以下ヘラケズリ。	淡褐色。	1mm前後の細 砂を含む。	
※ 13	壺	外面不明。内面口縁部削落不明、口縁部ヨコナ デ、頸部ハケ目調整のちナデ、肩部ヘラケズ リ。	淡褐色。	1~2mmの細 砂をわずかに 含む。	
※ 14	壺	口頸部内外面ヨコナデ。外面肩部以下ハケ目。 内面肩部以下ヘラケズリ。	褐色。	1mm前後の細 砂を含む。	外面黒斑。
※ 15	壺	口頸部内外面及び外面肩部ヨコナデ。外面肩部 はナデのち上より10~11条の擦拂波状文、工 具原体による連続刺突文。内面肩部ナデ、以下 ヘラケズリ。	外面淡褐色。 内面褐色。	1mm前後の細 砂を含む。3 mm大の砂粒有。	

実測図番号	器種	成形・調整の特徴	色調	胎土	備考
タ 16	底部	外面ハケ目。内面胸部ヘラケズリ、底部ナデ及び指頭圧痕。	外面暗褐色、内面淡灰褐色。	1mm前後の細砂を含む。	外面スス付着。
第25図 1	高坏	外面ヘラミガキ、一部ハケ目。内面剥落不明。	褐色。	2~3mmの砂粒をわずかに含む。	
タ 2	高坏	全面風化剝落著しい。外面ハケ目。内面口縁部ヨコナデ、以下不明。	外面褐色。内面淡褐色。	1mm前後の細砂を含む。	
タ 3	器台	外面受部及び接合部ヨコナデ、内面受部及び接合部剥落不明。台部外面剥落不明、内面ヘラケズリ。	赤褐色、淡褐色。	1mm前後の細砂を含む。	
タ 4	器台	外面ヨコナデ。内面ナデ。	褐色。	2~3mmの砂粒をわずかに含む。	
タ 5	器台	外面剥落不明。内面ヘラケズリ、据端部不明。	橙色。	1~2mmの細砂を含む。	
タ 6	低脚坏	全面不明。	淡褐色。	1mm前後の細砂を含む。	
タ 7	脚部	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	淡褐色。	1~2mmの細砂を含む。	
第26図 1	壺	口頸部内外面ヨコナデ。内面肩部ヘラケズリ。	外面褐色。内面淡褐色。	2~3mmの砂粒を含む。	口端部黒斑。
タ 2	壺	口頸部外面ヨコナデ。内面口端部剥落不明。口頸部ヨコナデ、以下ヘラケズリ。	外面褐色。内面黄褐色。	1mm以下の細砂を含む。	外面スス付着。
タ 3	壺	口頸部内外面及び外面肩部ヨコナデ。外面肩部以下ハケ目。内面肩部剥落ヘラケズリ、底部ナデ及び指頭圧痕。	淡褐色、褐色。	2~3mmの砂粒を含む。	外面スス付着。
タ 4	低脚坏	坏部外面剥落不明、内面ナデ。脚部外面ヨコナデ、内面肩部ナデ、据端部ヘラケズリ、据端部剥落不明。	淡褐色。	0.5mm以下の微砂を多く含む。	

第4章 まとめ

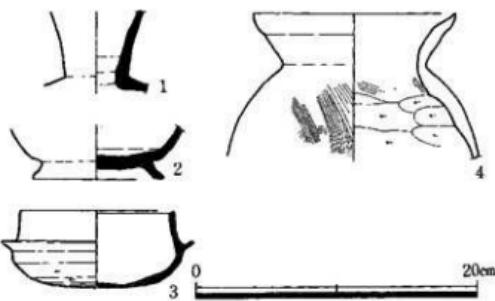
今回調査を行ったのは、第1地点（津ノ井40号墳）と第2地点（津ノ井宇称遺跡）の2ヶ所であった。調査は道路予定地（法面も含む）内に限られたため、遺跡の性格など詳細には解明できなかった。しかし調査の結果、津ノ井40号墳では古墳時代と中世の遺構を検出し、津ノ井宇称遺跡においては弥生時代終末期から古墳時代中期頃までの各層の遺構を確認した。以下、主な遺構と遺物について確認した事実と若干の考察を加えてみたい。

津ノ井40号墳では、土壙墓1基、周溝、墳裾列石と中世墓3基を確認した。中世墓のうち1基は集石を伴い古銭の出土をみたが、他のものは不明確で古銭を出土したものと1基確認したのみである。40号墳に伴う埋葬施設は、土壙墓のみである。頭位は不明であるが、北側には偏平な石を用いた集石があり、南側には完形の壺1個体が副葬されていた。周溝は、41号墳と共有していると考えられるが、周溝断面からみて41号墳を切って40号墳が築成されていた。外部施設として、墳裾列石と思われる石が検出された。第1トレンチで確認できたものは、周溝肩部に河原石が埋め込まれた状態で検出された。他にも2ヶ所で確認されているが、若干位置がずれているかもしれない。緻密な意味では墳裾列石といえないかもしれないが、3ヶ所の位置関係をみると限り、ほぼ同一レベルに位置し、墳丘の裾をめぐる様に剥えられているため一応墳裾列石としておきたい。また、墳丘築成以前の包含層（黒ボク土）より弥生式土器片の出土をみたことは、黒ボク土下面のローム台地上に弥生時代の遺構の存在を想起させるものである。

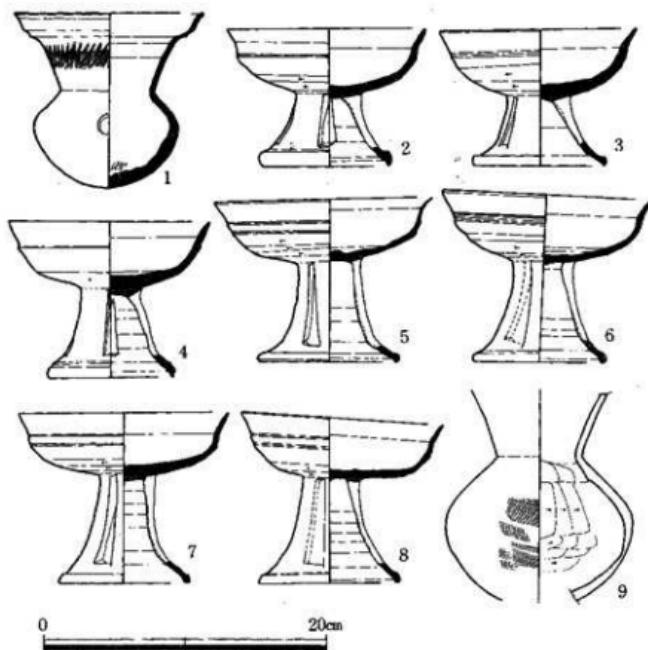
津ノ井宇称遺跡では、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴などの他多数のピットが検出された。これらの遺構の所属する時期は、概ね古墳時代前期前半から後半にかけてのものと思われる。貯蔵穴より検出された土器のなかには弥生時代終末期に属するものもみられた。また、上記の遺構が廃絶した後に古墳が造営されており、その時期は古墳時代中期以降と思われ周溝のみ遺存していた。

本遺跡においては、5基の貯蔵穴状の土坑が確認されたが、貯蔵穴としての特徴をもつのはSK1・3のみであった。2基とも断面形は台形を呈していたが、SK3は底面端部に側溝を巡らせていた。SK1は、遺物の遺存状態が良好で壺、壺、高杯、器台、低脚壺などがみられ、完形の遺物の多いのが特徴である。遺物は、青木遺跡土器編⁽¹⁾でみるとV・VI期のものが主体をなすと思われる。遺物のなかにはIV期に該当するものもみられ、弥生時代終末期には既に貯蔵穴としての機能を失なっていたものと考えられる。SK1は、遺物の量とその種類において群を抜いていた。加えて弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての一括資料を提供してくれた。このことは、鳥取県東部地域におけるこれらの時期の土器編作の作業に、貴重な資料となりうることを示唆しているといえよう。

注1 青木遺跡調査團『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ(本文編)』1978年



付図2 津ノ井戸谷出土遺物実測図



付図3 津ノ井39号墳出土遺物実測図

付表・1 出土遺物観察表(津ノ井蔵ノ谷出土遺物、津ノ井39号墳出土遺物)

実測図番号	器種	成形・調整の特徴	色調	胎土	備考
付図2 1	須恵器 盃	外面ヨコナデ。内面頸部ヨコナデ、肩部ナデ。	灰色。	1mm以下の細砂を含む。	外面肩部に緑色自然釉。
* 2	須恵器 底	内外面ヨコナデ、底部中央部ナデ。台部内外面ヨコナデ、接地面ナデ。	灰色。	2~3mmの砂粒を含む。	底部のみ残存。
* 3	須恵器 杯	外面上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ。内面ヨコナデ。	灰色。	1~2mmの細砂を含む。	完形。
* 4	壺	口縁部内外面ヨコナデ。外面腹部ヨコナデ、肩部感ハケ日。内面頸部ハケ目調整のちナデ、以下ヘラケズリ。	外面白褐色、内面白褐色、灰褐色。	3~4mmの砂粒を含む。	外面上ス付着。
付図3 1	須恵器 壺	口縁部内外面ヨコナデ。腹部外に11~12条の横筋波状文をめぐらす。外面肩部ヨコナデ、肩部以下ナデ。内面肩部ヨコナデ、底部ナデ及び工具状痕、脚部に円孔。	灰色、暗灰色。	1~2mmの細砂を含む。	完形。
* 2	須恵器 高杯	杯部外面上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ、内面ヨコナデ。脚部内外面及び接合部外面ヨコナデ。杯部外面に一条の沈線、脚部に四方向のスカシ孔。	灰色。	1~2mmの細砂を含む。	完形。
* 3	須恵器 高杯	杯部外面上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ、内面ヨコナデ。脚部内外面及び接合部外面ヨコナデ。杯部外面に一条の沈線、脚部に二方向のスカシ孔。	灰色。	2~3mmの砂粒を含む。	杯部右欠損。
* 4	須恵器 高杯	杯部外面上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ、内面ヨコナデ。脚部内外面及び接合部外面ヨコナデ。杯部外面に一条の沈線、脚部に四方向のスカシ孔。	灰色。	1~2mmの細砂を含む。	完形。
* 5	須恵器 高杯	杯部外面上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ、内面ヨコナデ。脚部内外面及び接合部外面ヨコナデ。杯部外面に三条の沈線、脚部に三方向のスカシ孔。	灰色。	2~3mmの砂粒を含む。	脚部左欠損。
* 6	須恵器 高杯	杯部外面上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ、内面ヨコナデ。脚部内外面及び接合部外面ヨコナデ。杯部外面に二条の沈線、脚部に三方向のスカシ孔。	外面暗灰色、内面灰色。	1mm前後の細砂を含む。	右欠損。 口縁部済山。
* 7	須恵器 高杯	杯部外面上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ、内面ヨコナデ。脚部内外面及び接合部外面ヨコナデ。杯部外面に二条の沈線、脚部に三方向のスカシ孔。	暗灰色。	1mm前後の細砂を含む。	杯部右欠損。
* 8	須恵器 高杯	杯部外面上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ、内面ヨコナデ。脚部内外面及び接合部外面ヨコナデ。杯部外面に二条の沈線、脚部に三方向のスカシ孔。	灰色、青灰色。	1~2mmの細砂を含む。	右欠損。
* 9	壺	口縁部内外面ヨコナデ。外面肩部ハケのちヨコナデ、肩部ヨコナデ、以下ナデ。内面肩部ヘラケズリのちナデ、以下ヘラケズリ。	褐色。	1mm以下の細砂を含む。	右欠損。 外面上赤痕。



津ノ井40号墳近景（北から）



調査風景



津ノ井40号墳近景（西から）



津ノ井40号墳表土除去後（東から）

図版 2



S X 2 鉄釘出土状況（西から）



S X 1 土壠断面（北西から）



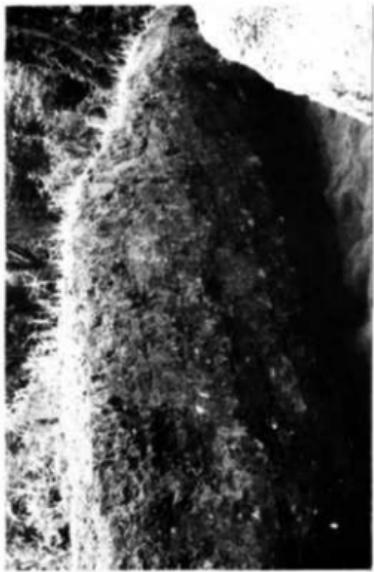
S X 3・4 石塊出土状況（北西から）



S X 3・4 積出状況（北西から）



SX-1 磨石露出状況（北西から）



堆丘盛土堆積状況



SX-1 磨石露出状況（南東から）



堆積石堆出状況（南西から）

図版 4



第2地点調査風景



第2地点近景（西から）

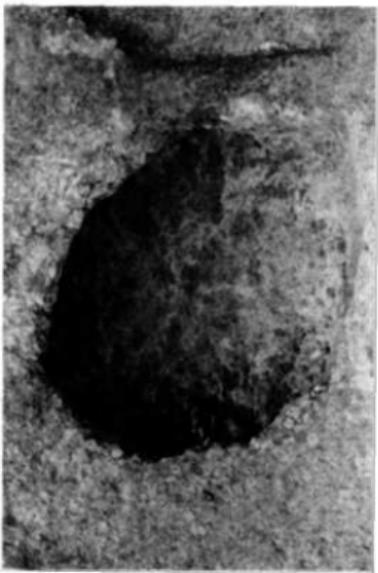
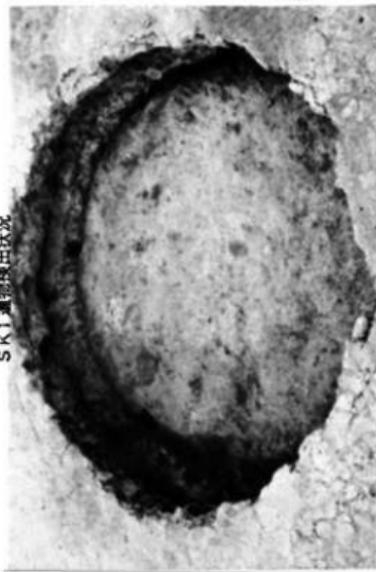


津ノ井字林遺跡(第2地点)遠景(東から)



第2地点近景（西から）

図版 5



図版 6



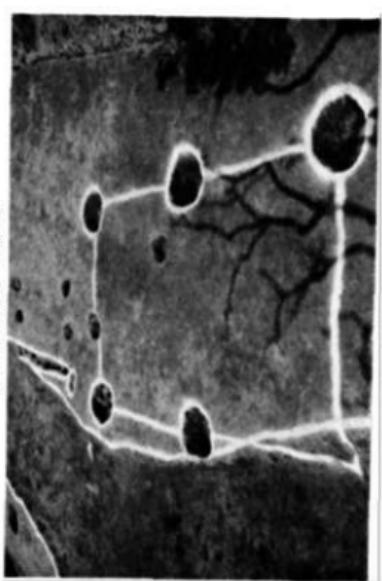
S 1 1 梗出状況 (南から)



S 1 2 梗出状況 (西から)

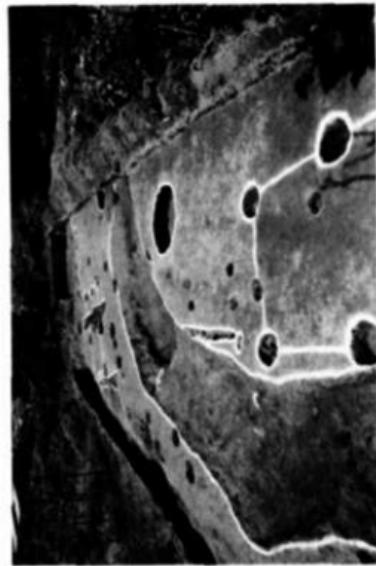


S B 1 梗出状況 (南から)

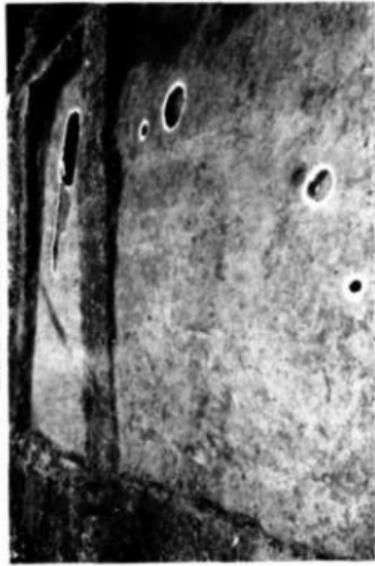


S B 2 梗出状況 (西から)

図版 7



第2地点調査後全景（南から）



第2地点Ⅲ・Ⅳ区全景（北から）

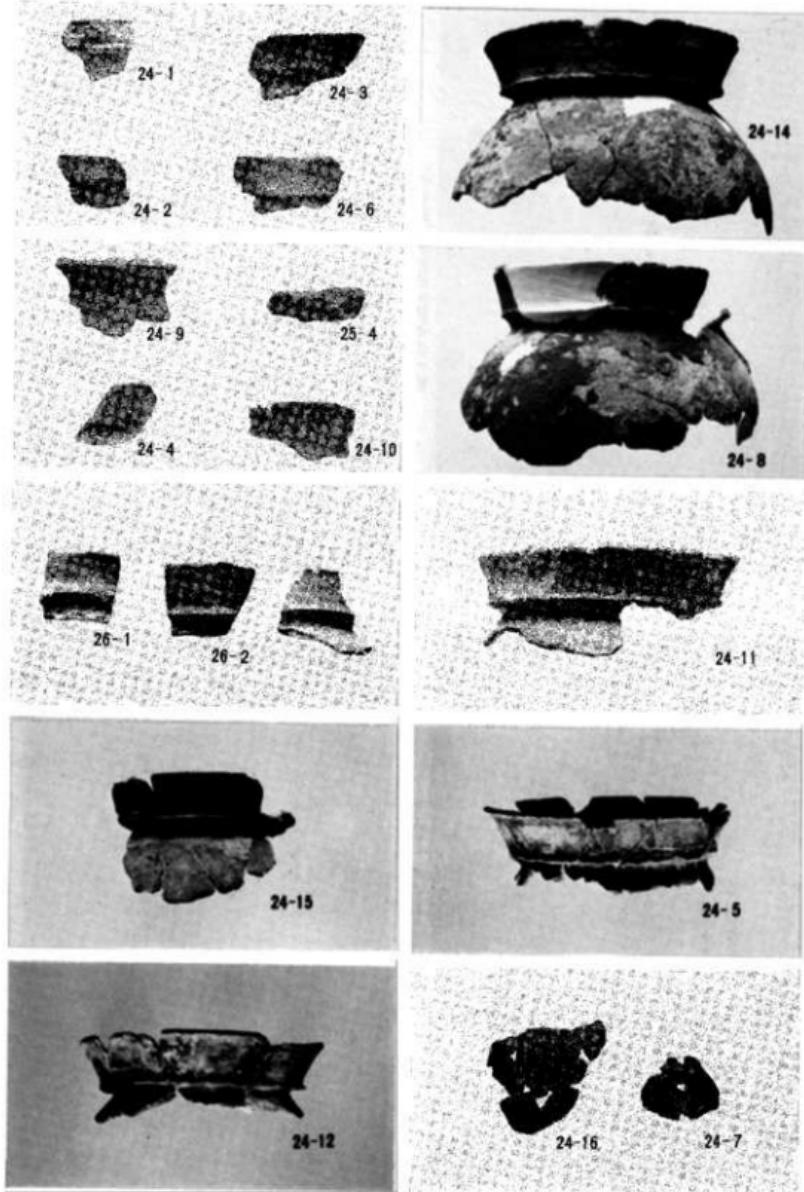


第2地点調査後全景（北西から）

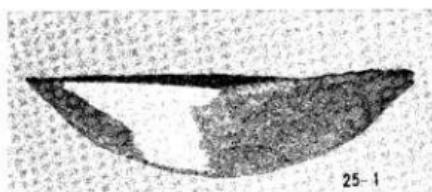


古墳周溝全景（北西から）

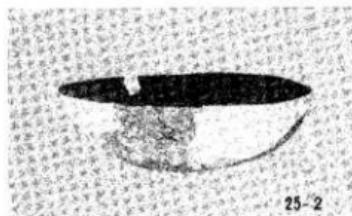
図版 8



図版 9



25-1



25-2



25-3



25-6

SK 3出土遺物



SK 3出土遺物



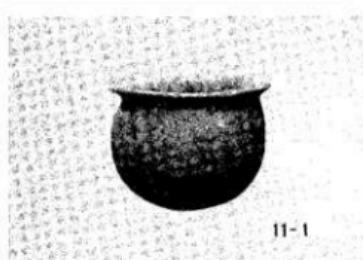
16-1



11-2



26-3



11-1



11-4



11-8



11-2

図版 10



鳥取市文化財報告書 14

昭和 59 年 3 月

津ノ井字祢遺跡・津ノ井40号墳

編集・発行 鳥取市教育委員会

鳥取市遺跡調査団

印刷所 株式会社 矢谷印刷所

鳥取市幸町96番地

電話23-7551番